（様　式）

令和５年度　学校評価書

学校名：静岡市立清水袖師小学校（袖師中グループ）

	大項目	中項目	グループ校の評価指標	自己評価	学校関係者評価委員会から （小中一貫教育推進委員会等）	改善策（来年度の目標設定、具体的な取組目標）
静岡型小中一貫教育における特色ある教育活動	【視点１】 学校の教育目標を グループ校で共有する	「やさしさと思いやりをもち、主体的に働きかける子・生徒」を育てる	①　（指標 1）「学校に行くのが楽しいと思う。」児童・生徒の割合（95%以上　校長） （学校説明） 児童 86.5%　　保護者 96.2%　　教職員 100% ・全体的に欠席者が少なく、学習や活動に意欲的に取り組んでいる児童が多い。また、休み時間などは友達と楽しそうにかかわっている姿がよく見られる。 ・保護者アンケートでも、「学校に楽しんでいっている」や「袖師の子は、とても子どもらしくて元気」、「男女や学年関係なく遊んでいて微笑ましい」などのご意見をいただいた。 ・安心・安全な学校づくりを合言葉にして、チーム袖師で指導をしているが、一方で、学校に来るだけで精一杯で学習への参加が難しい児童や、学習に前向きに取り組めない児童も複数いる。言葉遣いが荒く、トラブルになることも多いので、継続した指導が必要となる。	B	・袖師の子は人なつっこく、あいさつがよくできる。そのことが学校アンケートの結果からも見てとれるが、中学生になると地域に向けたあいさつが減ってしまう。こちらから声をかけても恥ずかしがってしまう。成長しても、このようなよい部分は残していきたい。 ・アンケートの結果や保護者のコメントから、学校が楽しいという児童が多く、とても安心した。授業はもちろんだが、学校の楽しさは、人間関係やその他の活動など、様々なところにある。ゆうかり活動などの、子どもたちがかかわりあう活動も楽しみの一つになる。小学校以外にも、中学生との交流を通して、身近なお兄さんやお姉さんの姿を見せていくのもよい影響がありそうだと思う。 ・かけ算九九など、その学年で身につけるべき事項をしっかりと身につけられるとよい。これまでは、コロナの影響があったが、これからは主体的に学習を組み立てる力をつけていけるとよい。 ・ＩＣＴを使うことで得られるもの、ＩＣＴを使うことで得られにくいものなどがある。学習の中で、活用すべき部分と、違うやり方でおさえなくてはならない部分を考えていく必要がある。変化の激しい時代である。道具としてどう使うのかを考えたい。昔ながらの「覚える」学習ではなく、主体的に活用できるか、判断できるかを育てていってほしい。	・学校教育目標に向かい、「子どもが主語」「子どもの主体性を育む」という方向性を全職員で共通理解しながら、教育活動を展開していく。 ・来年度も「チーム袖師」を合言葉に、全職員が全校児童の担任であるという意識で、積極的に児童にかかわっていく。 ・一部で悩みを抱えている児童や不登校傾向の児童もいる。本人や保護者の思いをよく聞き、必要に応じて外部機関と連携するとともに、教育相談部会を開き、その対応について検討をしていく。また、校内サポートルームを活用しながら、児童が安心して学校に通えるような支援、環境づくりを行っていく。
	【視点２】 ９年間の連続性、系統性を強化した教育課程を編成・実施する	主体的に取り組み、関わりを通して確かな学力を身につける連続性・系統性を強化した授業実践	②　（独自）授業中に、自分の考えを意欲的に表そうとした児童・生徒の割合（80%以上　学習・研修） （学校説明） 児童 68.2%　　保護者 72.9%　　教職員 85.7% ・前向きな姿勢で学びに向かう児童が増え、話し合い場面やグループ活動の場面で、自分の考えを意欲的に表そうとする児童が増えてきた。 ・「話す・聞く」について、ステージごとのめあてとしたり、黒板に短冊を貼ったりすることで意識が高まってきたが、自分の考えを意欲的に伝えることには課題があり、授業づくりを含めて考えていく必要がある。 ③　（指標 22）つながりのある系統的な指導を重視した授業改善を行っている教職員の割合（85%以上　研修） （学校説明） 教職員 100% ・これまで学んだことを思い返せるようにしたり、中学校を見据えて授業をしたりするように心がけている。また、個の実態に応じて、下学年の内容に立ち返るなど、学習のつながりを意識して授業を行っているから。 ・学年で教材研究を行う際にも、この学びはどこから繋がっていて、どこへ繋がっていくのかを意識して話し合っている。	B		・来年度も「伝える・聞く」のスキルアップ表を活用する。ステージごとに重点項目を決め、短冊にして黒板に掲示するなど、継続して指導を行う。 ・帰りの会にスピーチの時間を設定したり、ぐんぐんタイムで作文プリントを実施したりすることで、話す力・書く力（表現する力）を育成する。 ・読書活動を充実させ、手元に本を置く習慣を身に着けさせるとともに、学級内で本の紹介を行う機会を設ける。 ・学習指導案に「９年間の系統性」を記入し、来年度も「つながり」や「系統性」を意識して授業改善を行っていく。 ・小中連絡協議会や小中合同研修、学校公開日など、授業を見合ったり、話し合ったりする機会を来年度も継続して行い、授業改善につなげる。
	【視点３】 教職員の協働、児童生徒の交流	「小中一貫教育推進」のための職員研修、情報共有	④　（指標 23）学年や校種の枠を超えて、連携を図った教職員の割合（80%以上　教頭） （学校説明） 教職員 85.7% ・挨拶運動やペットボトルキャップ回収、ベルマーク回収を中学校と合同で実施することができ、昨年以上にかかわりを感じることができた。 ・職員研修を３回開くことができ、また、担当同士の連絡も増えてきた。	B		・小中一貫教育では、３回の職員研修を充実させ、小中の連携が深まるように計画していく。担当同士の連絡を密にし、お互いの活動が見えるようなお便りや掲示をしていく。 ・掲示板やチャットを活用して、学年内だけでなく、全体で話ができる環境づくりを進めていく。

		生徒会・児童会を中心とした交流活動	⑤　（独自）学年や校種の枠を超えた交流活動に参加した児童・生徒の割合（80%以上　特活） （学校説明） 児童 87.6%　　教職員 92.9% ・ペアとのかかわりやクラブ活動等を通して、異学年交流を多く行うことができた。特にペア学年とはよく交流し、昼休みも一緒に遊ぶほど仲よくなれている。学習でも他学年とかかわる機会を作った。 ・校内の交流は多いが、中学校との交流をより盛んにしていきたい。		・学校から、小中の連携をもう少しできるとよいという説明があったが、袖師地区は、一小一中で進めやすい部分もあるはず。今年度行った小中合同あいさつ運動を来年も続けていけるとよい。 ・学校アンケートの結果や、学校からの説明を通して、職員全体で一生懸命取り組んだ様子が伝わってくる。コロナ明けで、積極的な教育活動ができるようになったのも喜ばしいこと。経験は子どもにとって何にも代えられない財産となる。みんなで袖師の子の財産を増やしていきたい。 ・待遇面や仕事量などを含め、教員という仕事の大変さを様々なところで聞く。現場から声を上げて、伝えていくことで、働きやすさにつながっていくのではないか。 ・袖師学については、防災はもちろん、地域の祭りなどの行事ごとにも積極的に参加してもらうことで、地域に愛着を感じさせたい。桜祭りや横砂祭りもある。相撲も伝統的に行われている。小学校から中学校にかけて、９年間を通して学んでいけるとよい。 ・子どもは宝であり、平和の象徴でもある。子どもを育てていくには、学校・地域・家庭が一体となり連携していく必要がある。「袖師で生みたい」「育てたい」そして、「学校に行くと楽しい」と感じてもらえるようにするには、どうしたらいいか、みんなで考えていけるとよい。	・今年度の活動を継続するとともに、ゆうかり活動を全校同時に実施したり、ゆうかりペアで一緒に行う「ペア掃除」を新たに設定したりして、よりかかわる楽しさを味わう機会を作る。 ・クラブ活動や委員会活動なども、児童の主体性を大切にし、自分たちの生活を自分たちでよりよくしていく力を育てる。活動内容や計画を自分たちで考えていくことで、よりよいかかわりの姿を増やしていく。
【視点４】 地域との連携		学校と地域をつなぐ交流活動	⑥　（独自）地域防災訓練等の地域での活動に参加した生徒の割合（70%　教頭）＜中学校＞ （学校説明） ⑦　（独自）授業や学校行事の中で、地域の方々と交流できた児童の割合（80%以上　教務）＜小学校＞ （学校説明） 児童 84.1%　　保護者 81.7%　　教職員 100% ・コロナ禍における制限がなくなったことから、地域の方々と様々な場面で交流しながら学習ができた。 ・総合学習や社会で、外部講師を呼んで授業を行った。家庭科や音楽、図工などの授業でも、地域のボランティアの方々に御協力いただきながら、活動できた。 ・１年生のどんぐり教室や、３年生の相撲甚句など、地域の方とかかわる活動は大変有意義だった。	A		・コロナ禍における制限がなくなった今年度に増して地域の方々との交流活動を計画・実施していく。 ・ゆうかりサポーターを積極的に活用する。各学年での学習内容に応じて、どの学習のどの場面で、どのようなかかわりがあるとよいのかを検討する。 ・特に生活科や社会科、総合的な学習の時間では、地域を知り、地域に働きかける学習が望まれる。今年度行った交流活動を来年度に引き継ぐとともに、ゆうかりサポーターなど、地域の資源を活用して、新たな活動を計画していきたい。
学校環境		業務改善に向けた PDCA サイクルの実施	⑧　（独自）昨年度に比べ行事や取組方に改善が見られたと実感している教職員の割合（75%　教頭） （学校説明） 教職員 100% ・up-date アンケートで月ごとに見直しをし、改善できることはすぐに改善してきた。 ・デジタル化が進んだり、留守番電話を導入したりと働き方改革が進んだ。 ・人材が足りない部分については、積極的にボランティアを活用した。	A		・地域学校協働活動推進員や地域ボランティアを計画的に活用し、教員の負担を減らしていく。 ・毎月の Up-date アンケートを継続し、ボトムアップで改善を進めていく。
グループ校の軸となる取組・活動			グループ校の評価指標	自己評価		
しずおか学「防災」			⑨　（独自）「防災」袖師カリキュラムを学ぶことで、災害から身を守る意識・力が高まったと感じる児童・生徒の割合（80%以上　防災・総合担当） （学校説明） 児童 95.9%　　保護者 74.1%　　教職員 92.9% ・避難訓練の事前事後に災害時の行動について具体的に考えたり、防災についての学びを掲示板や発表等で発信したりする中で、自分の命を守る意識が・力が高まってきている。 ・教職員の中でも、「防災」はしずおか学の軸となる取組であることの意識が高まってきた。	A		・予告なしの避難訓練の回数を増やす。また、訓練内容を想定される災害時の状況に近づけ、緊張感のある避難訓練を目指す。 ・防災掲示板や高学年の防災発表を継続し、各学年の防災の学びが学校全体に広がるように、アウトプットの機会を増やしていく。

	大項目	中項目	評価指標	自己評価		改善策（来年度の目標設定、具体的な取組目標）
各学校の評価	「チーム袖師」の充実	全職員が全校児童の担任という意識をもった、安心安全な学校づくり	⑩　（独自）担任以外にも話しやすい、相談しやすい先生がいる児童の割合（85%以上　生徒指導） （学校説明） 児童 82.2%　　保護者 87.7%　　教職員 100% ・教員が、自分の学級の児童だけでなく、他の学級の児童にも積極的にかかわろうと意識をしている。また、児童から教職員に話しかける場面も日常的に見られる。 ・自分の学級だけでなく、学年での指導や、担当を交換して授業を実施している学年もあり、多くの教員と接する機会が多いことから、担任以外にも気軽に話せる雰囲気がある。	A	・子どもには失敗をさせてもいい。教師はレールを敷き過ぎずに、たくさん失敗をさせてやってほしい。小さな失敗の積み重ねは必ずや財産となる。ぜひ教員が一緒に寄り添って、その経験を次に生かせるようにしてあげてほしい。 ・職員にもそれぞれ得意なことがある。強みを生かして、みんなで役割分担をしていきながら教育活動を進めていってほしい。	・学年内で児童の情報共有を日常的に行う。そして、学年主任者会で、学年の児童のよい表れや気になる表れを情報共有する。他の学級の児童にも積極的に話しかけるようにして、よい表れを学校全体に広める。 ・やさしさと思いやりのある態度や言葉を児童が身につけていくために、教師がその見本を示す。児童の話を丁寧に聴き、児童の名前を呼ぶときは「さん」づけをする。指導をするときも、児童の人権を大切にする。 ・児童が自分で考えて行動しやり抜く場や、その子の個性が輝く場、活躍・挑戦の場を意図的に設ける。その活動を見届けて価値づけることで、児童の自己肯定感を高めることにつなげる。
	生徒指導の充実	一人ひとりに寄り添い、認め、励ます指導	⑪　（独自）学校生活の中で、先生方からほめられたり、認められたりしていると感じている児童の割合（85%以上　生徒指導） （学校説明） 児童 89.7%　　保護者 98.3%　　教職員 100% ・児童のよいところや頑張っているところを見つけ、それらをほめたり、認めたりしている。自己肯定感を高める言葉かけを意識している。また、音読カードに書くなどして、保護者にも積極的に伝えている。 ・ほめられたことを喜んで、嬉しそうに話す児童が多く見られる。			

					改善策（来年度の目標設定、具体的な取組目標）
静岡型小中一貫教育における共通となる教育活動（全国調査等の活用）	学力の状況 （全国学力・学習状況調査）	小学校	（学校説明） 国語・算数ともに、全国・県・市の平均を上回った。 国語･･･話し手が伝えたいことを的確に捉えながら、自分の考えをまとめる力が付いている。また、目的を意識して、中心となる言葉や文、情報を読み取る力が付いている。しかし、グラフやメモから読み取ったことをもとに、自分の考えを分かりやすくまとめて文章で書く力に課題がある。 算数･･･（　　）を用いた式や、加法と乗法の混合した式の意味を読み取る力が付いている。また、伴って変わる二つの数量について、表から変化の特徴を読み取ったり、説明したりする力が付いている。しかし、図形の問題で、正三角形や平行についての意味や性質の理解が不十分だった。 学習状況･･･「朝食を毎日食べていますか」や「毎日同じ時間に寝ていますか」などの項目で全国や県の平均を上回っており、生活のリズムができている子が多い。また、「友達関係に満足していますか」の項目でも全国や県の平均を上回り、友達と仲よく過ごせている子が多い。しかし、算数や国語の学習が将来、社会に出たときに役に立つと思っている子が全国や県の平均よりも少ないため、今後、生活経験に照らし合わせながら授業を進めていく必要がある。	・学習の中で、苦手な子に得意な子が教えるなどもよい。得意・不得意はそれぞれ違う。教科や学習内容によっても違う。人に教えるのも勉強になるし、よりよい人間関係作りにも繋がる。	・来年度は研修テーマを「子どもが主体的に学びを深める授業」とし、授業改善を図る。子どもの「～たい」（学びたい、考えたい、伝えたい）を大切にした授業作りをすることで、主体的に学習に参加し、学習が深められるようにする。 ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた学習環境の整備に取り組む。特に、授業準備の仕方や正しい姿勢などを明記した「学びの構え」を新たに提示し、児童が学習に臨みやすい環境を作り出す。 ・「学びの基本」「学びの構え」を第１回保護者会で示し、学習環境作りを家庭とも協力して行っていく。
		中学校	（学校説明）		
	体力の状況 （新体力テスト、全国体力・運動能力、運動習慣調査）	小学校	（学校説明） ①５０メートル走（走力）、②ボール投げ（投力）、③上体起こし（柔軟性）の全校平均記録を昨年度と比べると、男女ともに上昇傾向だった。男子は①②③のすべてが上回り、女子は①②は上回ったが、③が下回った。コロナ禍における制限がなくなり、様々な運動に取り組むことができることや、２０分休みや昼休みなどで積極的に外遊びをする機会が増えたことが大きい。ドッジボールラリー月間やリズム縄跳び月間の実施により、めあてをもって運動に取り組む姿が多く見られた。課題としては、日常的な運動量の個人差が激しいことが挙げられる。また、器械運動で捻挫をするなど、けがをすることもよく見られるため、日常的に運動をする機会を多くしたり、柔軟性を高めたりする運動を取り入れたりする必要がある。	・めあてをもって運動に取り組んでいるのはよいことである。また、全校で行っているリズム縄跳びはとてもよい取り組みである。縄跳び検定などもある。子どもに紹介して参加するのもよい。	改善策（来年度の目標設定、具体的な取組目標） ・来年度も引き続き、運動の機会を増やすために体育イベントを積極的に行っていく。また、リズム縄跳びや長縄跳びなど、年間を通して継続していけるように体育委員から全校に発信していく。 ・縄跳び検定や体力アップコンテストの参加の呼びかけをしていく。

		中学校	（学校説明）		
	生徒指導の状況 （学校いじめ防止基本方針）		（学校説明） ・いじめや問題行動を認知した際には、学校体制での対応を行い、児童が安心して学校へ通うことができる環境づくりに努めてきた。４月には、いじめを題材とした道徳の授業を全学級で行った。 ・年３回の「悩み事に関する調査」を確実に実施し、悩み事を抱えている児童に 100%対応することで、いじめ未然防止に努めている。職員室前に設置した「ゆうかりボックス」を活用したことで、児童が抱える悩み事にすぐに対応することができた。 ・日々丁寧に児童の話を聞くことで、よりよい学級づくりに繋げている。来年度も継続した取り組みを大切にしていきたい。	・４月のいじめの道徳の授業は、いじめを許さないということを伝える意味でもよい。 ・人は一人ひとり違う。それぞれ個性があるし、成長するペースも違う。そのことを考慮しながら、幅をもたせて子どもに指導をしていってほしい。	改善策（来年度の目標設定、具体的な取組目標） ・年度初めに、全学級でいじめに関する道徳の題材を扱い、規範意識のある温かな集団づくりやいじめ防止に努める。 ・年３回の「悩み事に関する調査」や職員室前の「ゆうかりボックス」を活用し、児童の悩みを把握するとともに、児童に寄り添い、いつでも安心して相談できるような信頼関係づくりに努める。また、児童の悩みに素早く対応できるようにする。